

万葉卷十四の成立について

菊池威雄

一

東歌とは一体如何なるものであろうか、そして如何に形成されて行つたのかということを解いていく為には、卷十四の成立の様相、あるいは作品自体の性格等を様々の角度から、考察していかなければならないが、本稿ではこの究極の目的に到達する一つの段階として卷十四の成立の一試案を述べることになる。

卷十四は、国土の判明している歌九〇首がその前半をなし、未勘国の歌一四〇首がその後が続いているが、筆者は以下述べるような理由によつて、前半の国土判明歌群が一巻の完成した歌集として編纂され、然る後に未勘国歌群が前者に倣つて（おそらくは前者とは違つた編者の手によつて）編纂され、それに追加されていったのではないかと考える。以上そのことを、地名、用字法、作品の発想様式等の観点から考察する。

二

以上のような試案を持つに到つた第一の理由は、東歌に地名を

読み入れたものがあまりに多すぎるという点にある。試みに本巻の二三〇首中地名をもつ歌数の全歌数に占める割合を算出し、その結果と、謡物系統に属するという点において東歌に類似する卷十一、十二の古今相聞往来歌、及び記紀歌謡中短歌形式のものを同様に算出した結果を比べてみると左の表のごとくなる。

	東歌	全歌数	地名を持つ歌の全体と比率
古今相聞往来歌	八五三	一三二	五七・四%
記紀歌謡	※延一一一	延三九	一五・八%
未勘国歌	一四〇	四四	三五・一%
			三一・四%

※ 記と紀に重複する歌は二首として取扱つた。

もとよりこの結果は、地名と普通名詞との区別のつけ難いものが相当あるので正確なものではないが、大勢を知るには十分である。これを見ると卷十四には地名を持つ歌が異常に多いことが分

る。もし従来考えられているように、卷十四が同一の資料から国士の判明する歌を先ず整理し、残りをその後につけて出来上ったものだとすれば、東歌はまさにその六十%近くの歌が地名を詠み入れるべき性格の歌だということになるのだが、それは、東歌が東国の民謡であるとしても不自然ではなからうか。そこで、試みに国士判明歌九〇首を特別なものとして、一応想外において、未勘国歌一四〇首だけを同様に算出してみると表の最後の行に示した如くになり、その比率は記紀歌謡のそれより低率となる。そうすると、東歌の地名過剰は一応解消さるべく思われる。このことはおのずから国士判明歌群を特別なものとして考えなければならぬということを示唆しているように思われる。

そこで改めて二つの歌群を見比べてみると、両者は地名及びその用い方において著しい懸隔のあることが知られる。この点については後に作品の発想様式を述べる際に再び取り上げたい。

三

卷十四が同一の資料から国士判明歌を抄出し、残りを整理してその後に置くという編纂方法によって出来上ったものとすれば、そこには幾多の矛盾点がみられる。従来指摘されてきている如く、未勘国歌の中に明らかに国名が判明する歌が散在していることがその一つである。例えば、国士判明歌群の「譬喩歌」の部に志太の浦を朝榜ぐ船はよし無しに榜ぐらめかもよしこさるらめ

右の一首は、駿河の国の歌

(三三三〇)

という歌があるが、次のようなものが未勘国歌群の「雑歌」に収められている。

都武賀野に鈴が音聞ゆ可牟思太の殿の仲子し鷹狩すらしも

(三四三八)

「可牟思太」は「上志太」であろうが、だとすればこれが未勘国歌群に入れているのは如何なるわけか。三四三〇が駿河の歌である唯一のきめ手は「志太」という地名だけである。「志太」は平安朝の風俗歌にも「信太^註の浦を朝漕ぐ小舟……」とあり、その名を聞いただけでも、その所在国がわかるほど有名な土地であつたらしい。従つて三四三〇を駿河の国の歌として国士判明歌群に入れた編者が、三四三八を未勘国歌群の、しかも首座にすえるとはどうしても考えられない。

また未勘国歌群の「相聞」の部にある

坂越えて安倍の田の面に居る鶴のともしき君は明日さへもがも

(三五三三)

は卷三の「春日藏首老」の歌

焼津辺に吾が行きしかば駿河なる阿倍の市道に逢ひし児ろはも

(二八四)

により駿河国の歌であることが知られる。これを未勘国歌群に属せしめることは、国士判明歌群を編纂してきた編者としてはあまりに不注意と言わなければならない。また

東路の手児の呼坂越えかねて山にか宿むも宿はなしに

(三四四二)

東路の手児の呼坂越えて去なば我は恋ひむな後は逢ひぬとも

(三四七七)

は卷十二の「磐城山ただ越え来ませ磯崎の許奴美の浜に吾立ち待たむ」(三一九五)とともに、駿河国風土記逸文(下河辺長流の「続歌林良材集」)に見える地名起源説話に付帯した歌で、駿河国の歌でなければならぬ。このことについて「万葉集全釈」は「この集の編者が古風土記の内容を知らなかったことを示すように思う。もし知っていたとすれば、卷十二の歌もこの巻に収めて、共に駿河国歌とすべきである」と述べているが、たとえ古風土記の内容を知らなくても、上の句を同じくする二首の歌がともに本巻に収められていることから推すと、当時の人々に膾炙していた有名な歌であったと考えられることから、編者がそれらの所属を判別できなかったとは到底考えられない。

右の二首については、「手児の呼坂」が当時周知の土地であったという証拠がない以上断定は差しひかえねばならないが、次のような例は如何に解釈すべきであらうか。上野国の歌に

(三四〇九)

伊香保ろに天雲い継ぎかのまづく人とおたはふいざ寝しめとら

とあるが、これは未勘国歌群の

(三五一八)

岩の上に懸る雲のかぬまづく人ぞおたはふいざ寝しめとらと初二句を異にしているにすぎない。前者を上野国に分類した編者が後者を未勘国歌群に収めるのはあまりに不合理と言つてよい。当然上野国の歌の中に一括し、別伝として左註に記すべきであらう。本巻の左註から推すと本巻の資料には少なくとも四種類

のものが考えられる。即ち、イ、本巻の基礎資料というべき本口、或本、ハ、一本、ニ、柿本朝臣人麿歌集、等であるが、この二首がイの中に同居していたのなら「一云」として、もし、後者が口ないしはハにあったのなら、「或本日」あるいは「一本日」として註すべきだと思う(本巻の左註については様々の疑問があるので今後の検討を待つことにしたい)。

その他先学の調査により、国名が推定できる歌も相当数あり、当時不明であったとは考えられないような歌も未勘国歌の中に少なくなく、従つて矛盾している面は枚挙に暇がない程である。しかしこれらの矛盾も、二つの歌群がそれらの基礎資料や編者を異にしていると考えればおのずから氷解すると思われる。

註「信太」は常陸国の「信太の郡」(万葉卷二十、四三六六の左註に八信太郎物部道足Vとみえる)だとも考えられ、そのあたりが利根河流域の湖沼地帯であることを考え合わせると、三四三〇も常陸国の歌にした方が自然だと思われる。それを駿河国の歌にしているのは、資料そのものが国分けしてあるとかいったような根拠があったのかもしれない。

四

次に用字法の面から考察することにする。本巻は地名の一部を除けばほぼ一字一音で表記されている。このような方法をとっている以上、二つの歌群の間にさほどの相違がでてくるはずはないのであるが、なお詳細に観ていけばかなりの相違を指摘することができる。特に注目されるのは、「ネ」の音に当てられた文字で

ある。歌群別に観てみると、

国土判明歌 禰、尼、

未勘国歌 禰、宿、寝、年、哭、鳴、根、

の如く、未勘国歌群の方が多彩である。これらを音の持つ意義によつて表示すると次のようになる。表の最上段は意義を正訓で示したもの、二段目は用いられている文字、数字は字数を示す。

根		(音)			寝			ネ
根	禰	鳴	哭	禰	年	寝	宿	禰
	三?※2			二※1 (三)				一〇
	三	一	一	二	一	一	一四	一三
	二※3 (三)							
								国土判明歌
								未勘国歌

その他、「布禰(舟の意)」、「禰(嶺の意)」のごとく、両歌群にともに出てくる語で、同じ字のあてである例もあるが、省略した。左にそれらの実例を示すことにする。

○禰 宿 寝 年 (寝)

伊香保呂能 夜佐可能為提爾 多都弩自能 安良波路万代母
佐禰乎佐禰氏婆 (三四一〇) —— 上野国の歌

麻可奈思美 佐禰爾和波田久 可麻久良能 美奈能瀬河伯爾
思保美都奈武賀 (三三六六) —— 相摸国の歌

可波加美能 禰自路多可我夜 安也爾阿夜爾 左宿左寝氏許
曾 己登爾氏爾之可 (三四九七) —— 未勘国の歌

武路我夜乃 都留能都追美乃 那利奴賀爾 古呂波伊敏杼母
伊末太年那久爾 (三五四三) —— 未勘国の歌

○禰、哭 鳴 (哭)

奈勢能古夜 等里乃乎加耻志 奈可太乎禰 安乎禰思奈久与
伊久豆君麻氏爾 (三四五八) —— 未勘国の歌

都流伎多知 身爾素布伊母乎 等里見我禰 哭乎曾奈伎都流
手兒爾安良奈久爾 (三四八五) —— 未勘国の歌

安之能葉爾 由布宜利多知氏 可母我鳴乃 左牟伎由布敏思
奈乎波思奴波牟 (三五七〇) —— 未勘国の歌

以上のごとく、「ネ」の音は国土判明歌群においてはすべて「禰」に統一されているのに対して、未勘国歌群は「禰」に執せず、前者に見えない文字を六字も用いている。特に「寝」の語は両歌群を通じて頻度数多く、用字の上で著しい相違をみせているのは注目に値しよう。但し、先にも掲げておいたように、国土判明歌の中には唯一例願望の終助詞に当てられた「尼」がある。上野国の歌で「移乎佐伎太多尼」(三三三三)がそれである。この種の助詞は本巻に十二例(国土判明歌群に七、未勘国歌群に五)あるが、「尼」の一例を除く十一例は「禰」に統一されている。

例外的な存在と言つてよいであらう。

その他の音でも、これとはば同様な現象を呈しているものがないが、殆んどは筆録しているうちに、たまたま違つた字を当てたのだといふことで片付けられそうなものばかりである。しかし右に述べた「ネ」音においては偶然とは考え難い。このような用字の相違は、二つの歌群の編者が同一人でないことを暗示していると考えられる。

※1 () 内の数字は左註に引かれた歌をも加えて調査して得た字數

※2 刀禰河泊(三四一三)——利根川、波故禰(三三六四)——

箱根、波故禰(三三七〇)——箱根、の三例であるが、利根川にしても箱根にしても本来「根」と表記されるものか否かよく分らない。

※3 () 内の数字は根都古具佐(三五〇〇)——ねつこ草、を加えたもの。

五

以上述べてきた試案を決定づける最も有力な根拠は、二つの歌群における作品自体の本質的な相違の中に求めなくてはならない。筆者は、本巻を通覧する時、両者の歌はその様式の上で、大いに懸隔を保っていることを感ずる。本巻の歌を代表する発想様式は、なんと言つても序発想であらう。これは国土判明歌、未勘国とを問わず共通してみられるところのものであつて、本巻所収歌の最も大きな特色の一つである。そして、その序詞は、地名の

用い方と密接なる関係を持っているので、ここでは、地名と序詞とのからみ合ひという観点から本巻の歌を眺めていきたい。そうすると、次のようないくつかの類型を指摘することができる。

A、大地名+小地名+(景物)↓本意
大地名 小地名 景物

常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれ何どか絶えせむ
(三三九七)

B、大地名+景物↓本意
大地名 景物

筑波嶺にかか鳴く鶯の音をか泣き渡りなむ逢ふとはなしに
(三三九〇)

C、小地名+小地名+(景物)↓本意
小地名 小地名 景物

芝付の美宇良崎なるねつこ草あひ見ずあらば吾恋ひめやも
(三五〇八)

D、小地名+景物↓本意
小地名 景物

安齊可瀉潮干のゆたに思へらばけらが花の色に出めやも
(三五〇三)

E、普通名詞+景物↓本意
普通名詞 景物

青嶺ろにたなびく雲のいさよひに物をぞ思ふ年のこのごろ
(三五一一)

ここで「大地名」というのは、極めて広い地域を示す地名、つまり国名、あるいはそれに準じるもの、と地域的には広範囲でなくとも、広くその名を知られている有名な地名のことで、「小地名」

とはそれに対して、狭い地域を示し、中央にまでその名が知られなかったと思われるもの、「景物」とは序の部分が本意に転換していくきっかけをなす「雲」とか「玉藻」とかいいた類の語を示す。AとCの「景物」に（ ）がしてあるのは、小地名が主として同音の關係で直接本意に転換していく類のものをもそれらに含めるからである。Eは地名を持たない序歌である。

序歌を地名との関連において類型に別けてみたのは、地名こそ先にも触れたごとく、民謡とどの程度のつながりを持っているかを知る有力な鍵であり、従って、本巻所収歌の性格を決定づける手がかりとなると考えるからである。

さて、二つの歌群とこれら五つの類型とをつき合わせてみると、A、Bは国土判明歌群を、C、D、Eは未勘国歌群を代表する発想様式であるということが分る。もとより、未勘国歌群の中には、当時その地名の存在する国名が分らなかったとは信じ難い歌をも交えているはずで、C、Dの中には、A、Bに該当する歌も当然あつて然るべきであるが、一応それぞれの類型に該当する歌の数をみると、A、二六首、B、三二首、C、一首、D、一三首、E、二四首となる（中には序詞か枕詞か、地名か普通名詞か判別し難いものがあるが、疑わしいものは省いた）。A B合計すると五八首になるが、これは国土判明歌九〇首の三分の二弱に相当し、A、Bの様式が国土判明歌群の発想様式だと言つても過言ではない。一方、C、D、Eの合計は三八首で、未勘国歌群一四〇首の四分一強に相当するにすぎず、国土判明歌群に比べれば、序発想にそれほど固執していない。このことは、未勘国歌群

が、内容的にも様式の上からみてもバラエティに富んでいることを示している。

そこで問題になるのは、A、Bが民謡との関連において、C、D、Eと本質的な相違を持たないのならば、以上のことは、同一の資料から、国名や有名な地名——大地名——を持つ歌を抄出し、残りを整理してそれに追加するという編纂の手続きを証する最も有力な根拠となり得るであらう。しかし、筆者は、A、Bと、C、D、Eとは本質的に異った母体から生み出されてきた歌だと考える。何故なら、特にA、Bのうち大地名が国名であるような歌は、以下述べるごとく、政治的意図のもとに、朝廷の官人によって創作、もしくは改変された歌、つまりは一見民謡らしき体裁をそなえていても、本巻の中で最もそれから隔った歌だと思ふからである。

そのことを考えるに先立つて、民謡と地名との關係について触れておかねばならない。民謡とは厳密に言えば、一定地域の地域人が創り出し、受け継ぎ、その地域内で語られる歌である。もとより広範囲に渡つて流転している歌でも一地域に固定すれば、それはその土地の民謡ということが出来る。民謡がそのようなものであるなら、自分の居住地に愛着を懷く地域人がその地域の名を歌に謡い入れるのは当然であり、従つて民謡に地名の多いのはそのためである。だからそこに見られる地名はあくまで地域人の限りなき愛着をとおして謡われるものでなくてはならない。

そこで論をA、Bの国名を冠する歌に戻すことにするが、武田祐吉博士は「東歌を疑ふ」（『上代国文学の研究』所収）において、

東歌の民謡性を否定する一つの根拠として、地名に国名を冠することや、大地名を冠するのは、土着人の歌としては不自然であることを指摘され、結局このような歌も、国府や宮廷官人の「風流」による創作だと断じられたことは周知のことである。結論はともかく、この指摘は正しいと思う。確かに博士の説への反論者が異口同音に主張することく、後世の民謡の中には、「土佐の高知の」式のものも少なくはないが、国名を語うということは、他国を強く意識せずしてはできることではない。昔日の東国人達のはたしてそこまで視野を広げる程成長していたであらうか。筆者には到底考えられないことである。このことは、本巻以外の巻で、初句に国名を置く歌を見ればおのずから理解されると思う。初句に国名を置いた短歌は、序歌以外のものをも含めて、本巻以外の巻に五五首数えるのみであるが、大半は博士の説かれるごとく、旅行者や宮廷官人の創作にかかる歌である。この事實は、初句に国名を置く歌が、一地域に居住する土着民よりも、多くの国を知り、その他の国との対比において、自国もしくは他国の様相を認識し得る立場に居る者によってこそ、容易に作り出される性格のものであることを暗示している。ところが興味深いことは、初句（国名に枕詞が冠してあれば二句目）が国名で、序歌である歌、つまりA、Bの様式を持つものになると、逆に巻十一、十二を中心とする作者未詳歌の中に多く見られることである。本巻以外にはこの種の歌二十首、うち、作者名の記されているもの、もしくは詞書や左註によって貴族の作であることが知られるもの五首（三一、四八七、五五一、六〇〇、三三三五）、作者未詳歌

十五首（一三七六、一三九三、二四三四、二四三九、二四四〇、二四七一、二四八七、二七九五、二七九八、二八〇五、二八三四、二八五六、三〇二七、三一三〇、三三二〇）を数えることができる。そのうち本巻の歌に近い性格を持っているのはやはり作者未詳歌であらう。二三例示すると、

大和の宇陀の真赤土の丹著かばそこか人の吾を言なさむ

（一三七六）

紀の国の飽等の浜の志貝我は忘れず年は経れども（二七九五）
伊勢の白水郎の朝な夕なに潜くといふ鰻の貝の独念にして

（二七八九）

の類で、これらは言うまでもなく類想の多い歌である。景物より本意への展開の面白さが契機となつて流転した謡物であるが、畢竟貴族の風流の域にとどまる歌である。

こうみると、本巻のA、Bの歌の性格は、ほぼ見当がついてくるように感じられるが、実は、作者未詳歌のA、B様式の歌が、初句の国名をいさかも不自然にしていけないのに比べて、本巻のそれは依然として唐突であるという点において、それともかなり性格を異にしているのである。

本巻より代表的な例を引くと

上毛野安蘇の真麻群かきむだき寝れど飽かぬを何どか吾がせむ

（三四〇四）

上毛野佐野の舟橋取り放し親は放くれど吾は放るがへ

（三四二〇）

遠江引佐細江の漕標吾を憑めてあさましものを（三四二九）

常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれ何どか絶えせむ

(三三九七)

麗々しく掲げた国名は、内容の素朴な民謡性といたく矛盾して白々しくおさまりかえっている。これらの類の歌が実際に東国の民によって謡われていたとすれば、彼等が愛着を覚える地名はせいぜい小地名までで、国名にまで及ぶとは考え難い。先の作者未詳歌の国名が一首の中でいささかも浮き上っていないのは、なによりもその担い手が貴族であることによるし、また、使われている国名が、国の名としてではなく、「近江の海」、「伊勢の海」のごとく、具体的な景勝地の名称として用いられているものが大半を占めていることにも原因している（もとより本巻にも「相摸嶺」、「武蔵野」のごとき用い方も相当数あり、そのような歌は、作者未詳歌と同じよう不自然な感じを与えない）。では、このような不自然さを顧みず、如何なる理由で国名を麗々しく初句に掲げなければならなかったのか。景物より本意への展開が極めて民謡的であるだけに、この疑問は一層深まる。筆者はこれらの歌を次のように考えている。即ち、民謡としての味わいをたわめてまでも、国名を冠するのは、これらの歌の担い手が、自国の歌であることを主張しなければならぬ立場に立たされていたからではないか、と。

そこで想い起されるのは、大嘗会の時、悠紀、主基の国が奏上する風俗歌である。悠紀、主基の風俗奏上は古くから行われていたが、この奏上には、諸国を代表して天皇の御代を賀し、天皇に忠誠を誓約するということが、そうすることによって名譽と恩典

を授かるという二つの目的があった。ここに自国をことさらに主張しなければならぬ必然性があった。古今集巻二十は悠紀、主基の風俗歌を五首伝えているが、そのうち四首まで上句に国名を掲げている。

まがねふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ
美作や久米の皿山さらさらに我が名は立てじ万代までに
美濃のくに関の藤川絶えずして君に仕えむ万代までに

近江のや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千年は

右のうち「美作」と「美濃」の歌は典型的なA、B様式である。これらと、先に引いた国土判明歌との間に、如何ほどの相違があるであろうか。このように考えてくると、国土判明歌群が形成される途上には、朝廷の側からみれば絶えず忠誠を誓わせておかねばならないという、それに支配されている国にとって、誓約を余儀なくされるとともに、それにおもねらなければならぬというような政治的な息がかかっていることが分る。最も帰順の遅い東方の諸国が常にそういう政治的圧力にさらされているということは言うまでもないことである。筆者は、本巻の、初句に国名を置いた歌は、最初から国名が置かれていたのではなく、地名→景物→本意、という謡物に多い様式の、上の句の地名をすりかえることによって自由に流転していくという特性が利用されることによって、形成されたものと考えている。次の二首の歌はこのことを示す好例ではなからうか。

上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね

(三四一六)

安波をろのをろ田に生はるたはみ蔓引かばぬる吾を言な絶え
(三五〇一)

前者がAの様式に相当すれば、後者はDの様式にあたるであろう。C、Dは、地名をすりかえるだけで簡単にA、Bにすることができ。おそらく、A、Bのうち、特に大地名が国名であるような歌は、C、Dを母体にして形成されたものであろう。なお、右の類歌としてはもう一首、武蔵国として「入間道の大家が原のいはる蔓引かばぬる吾にな絶えそね」(三三七八)とあって、初句は「入間道」となっている。「入間」は郡名で国名に準ずる大地名であるが、道の名称として使われているために、不自然なものではなくなっている。このような例は国土判明歌の中にも、先にも触れたように相当数あるが、そのような用い方がしてあるために、C、Dの自然な民謡性を持ちながらも、A、Bの働きをなし得ている歌だと言えよう。

以上は本巻の序歌を中心にして考えてきたのであるが、それによっても国土判明歌群はその背後に政治的な色彩を濃厚に持った特別の歌群であるということができよう。それに対して未勘国歌群は、前者のような統一性を欠いた歌群ということが出来る。従来指摘されてきているように、東歌としては異質的な防人歌や、旅行者の作と思われるような歌をも雑然と内に含めている。しかし、概して言えば、後者は前者よりも、より東国の民謡に近い歌群ということが出来る。この濃厚なる民謡性は、前者が被った政治的圧力による改変、洗練化をいまだ知らざることによって保た

れていると考えられる。このことは、国土判明歌群と、未勘国歌群とがそれぞれ異なった資料から成立したことを暗示している。

六

以上、巻十四を、地名、用字法、発想様式等の観点から考察してきたのであるが、それ等の結果を総合してみたとき、巻十四は、前半の国土判明歌群が一巻の完成した歌集として成立し、然る後にそれとは違った資料から未勘国歌群が蒐められ、前者とは違った編者が前者に倣って整理し、それに拾遺のようなかたちで追加していくことによって形成されたのではないかという試案は可能である。それを決定づける為には、左註や編者、成立の時機等、多くの問題が残されているが、今後の調査を待ちたい。これらの資料がどこから出たものであるかについてはおおよその見当はつけられる。少なくとも、国土判明歌群の資料は、古今集の東歌や風俗等を考え合わせ、その他様々な理由を考慮に入れるとき、それは雅楽寮に保存されていたと結論づけられる。さらに、奈良朝期に雅楽寮において実際に演奏されていた「東歌」を本巻所収歌の中に指摘することもできる。国土判明歌が雅楽寮に保存されていたものを基礎資料にしているとすれば、未勘国歌は、それに含まれている防人歌を考慮に入れれば、その基礎資料は雅楽寮以外のところに求めなければならぬ。それらのことについては、稿を改めて述べることにしたい。